棟方志功直筆の絵

高野敦志



目次

表紙　棟方志功「乾如之韻」

棟方志功直筆の絵

　僕の家にはかつて家宝があった。版画家棟方志功（むなかたしこう）直筆（じきひつ）の絵で、掛け軸に装丁されて客間の床の間に飾られていた。これは母が若い頃、勤め先に出入りしていた業者の社長から、日頃の働きに報いるべく贈られた物だった。

「この人はね、もうすぐ大物になるよ」

　その言葉通り、棟方志功は一九五六年に、「二菩薩釈迦十大弟子（にぼさつしゃかじゅうだいでし）」などでベネチア・ビエンナーレの国際版画大賞を受賞した。細部にこだわらない大胆な彫（ほ）りは、円空仏（えんくうぶつ）を想起させる。棟方自身「日本のゴッホになる」と豪語（ごうご）したそうだが、力強いタッチで魂を注ぎ込んだ点では、「ひまわり」の画家に近いものが感じられる。

　棟方が版画を制作する前に、構想を練るために描いた絵が、掛け軸となって社長の手から母に渡ったのである。その絵は長らく母の実家に飾られていた。

　あるとき、地主だった本家の大伯父がやって来た。戦時中に一家が空襲で焼け出された際に、祖父だけは「この家から出た者だから」と座敷に上げ、祖母と伯母、母は「土蔵（どぞう）に入っていろ」と命じた大伯父である。床の間に飾られた掛け軸を見るなり言い放った。

「何だ、このてるてる坊主みたいな絵は。見っともないから片づけろ。蔵の中にある鶴と松の掛け軸を持ってきてやる」

　質屋（しちや）をやったり、兜町（かぶとちょう）に通ったりしていた人だから、美術

などには関心がなかったのだろう。
　結婚して実家を出るとき、長らく床の間に飾られていた絵を、母は持ち出すのをためらった。父がそのことを画家だった従兄（いとこ）に話すと、「あの家には物の価値が分かる人間がいないから、持ってきた方がいい」と言われた。こうして、棟方志功直筆の絵は、僕の家にやって来たのである。
　当時は小学生だったので、自分も絵の価値が分からなかった。何で顔が丸いんだろう。髪を水色に染めたのはなぜだろう。絵の味わいに気づいたのは、成人になってからだった。禅僧が書いた円に目鼻をつけたような絵だが、白群（びゃくぐん）と辰砂（しんしゃ）を使った顔料（がんりょう）の色が、透き通るようで不思議だった。洋画では見たことがない色合だった。

　四方には「乾如之韻（けんにょのいん）」とある。これは「乾坤妙如妃図（けんこんみょうにょひず）」と同じ意匠（いしょう）で描かれている。天地を女神になぞらえた絵で、大きく見開かれた柔らかな眼差し、上品に閉じられた唇、髪には大空の色が配され、赤い花を飾りとしてまとっている。萌（も）える大地への讃歌（さんか）を描いた絵で、墨の線にもふくよかな女性の豊饒（ほうじょう）さが表されている。
　それから歳月が流れた。僕と妹は年取った母を連れて、青森を旅行した。母は足腰が弱っていたから、一緒に行くのは今回までだと感じた。奥入瀬（おいらせ）のホテルに泊まり、レンタカーで八甲田山（はっこうださん）、十和田湖（とわだこ）、三内丸山遺跡（さんないまるやまいせき）の順に回った。最後に訪れたのが、棟方志功記念館だった。
　実は、掛け軸がうちにやって来たとき、父は装丁し直してい

た。その際、業者に数十万円で売ってほしいと言われたので、本物であるらしいことは分かっていた。ただ、専門の学芸員がいる記念館なら、鑑定は間違いないだろうと話していた。

　事前に母と相談したのは、そこまでだった。家宝としてきた棟方の絵は、やはり本物だった。ところが、母はいきなり「寄贈致します」と言い出したのだ。話が違うと妹が怒り出した。いつでも見られると思っていた僕も、突然、絵との別れが来たのに愕然（がくぜん）とした。ただ、母が所有してきた物であるし、きちんとした所に保管しておくべきだという意見に、異を唱えることはできなかった。

　家には以前撮影した絵の写真だけが残った。しばらくして、青森の記念館から礼状が届いた。棟方の絵が傷まないように、

掛け軸の上下は切り離して収納することになったということだ。

　昨年、母も亡くなり、寄贈した絵のことを思い出した。インターネットで調べたら、棟方志功記念館が、二〇二四年三月三一日をもって閉館することを知った。母と訪れた記念館も、あと半年余りでなくなり、寄贈した絵も永（なが）の住まいから追われることになった。もうこの目で見ることはないかもしれない。

あとがき

棟方志功記念館は、施設の老朽化により、閉館することに変わりはないようだ。収録されている美術品は、青森県立美術館に収蔵されることになった。記念館の建物と敷地は、閉館後も文化施設として利用する方向で検討されているという。

なお、表紙の絵は母が所有し、棟方志功記念館に寄贈したものである。自宅にあった当時、掛け軸の形で撮影した。

二〇二四年一月二十七日

高野敦志